

4) 平成14年7月に沖島南東部に設置した刺網の汚損状況について

孝橋賢一・幡野真隆

【目的】

近年、琵琶湖北湖の沿岸部全域でエリ付着物増加が問題となっている。これはエリが琵琶湖漁業における最も主要な漁具であることから重要な課題の一つであるが、一方、もう一つの重要漁具である刺網漁業においても設置場所、時期などによって漁具の汚損が激しいことがあるとの情報が聞かれるようになってきた。

そこで今回は試験的に7月にアユの刺網漁業が比較的良好に操業されている沖島南東部に水深別に刺網を設置し、その汚損状況を把握することを目的とした。

【方法】

備船により、平成14年7月23日の沖島南東部の浅場（水深約12m）、深場（水深約27～33m）に分けて刺網（目合：23節、長×深：20t \times 4m）を設置した。設置時間は約6時間（9:50～15:40）とし、設置方法は浅場は湖底に沿わせる形で設置（ジカバエ）し、深場はジカバエとほぼ中層に浮かせた形の設置方式（宙づり）の2通りとした。設置方向は東西向に設置した。

設置した刺網1把を15リットルの水道水で洗浄し、その1リットル中の懸濁物の乾燥重量および灼熱減量(%)として評価した。また洗浄水の一部を終濃度約5%となるよう中性ホルマリンで固定し、検鏡を行い、その優占種を調査した。

【結果】

今回、水深と設置方法を変えて約6時間現場に網を設置したが、特に操業に支障が出るほどの付着物のついたものは再現できなかった。また設置したそれぞれの網には、昼間網を設置したのにもかかわらず、多数のアユが捕獲され、その影響も無視できない程度であったものと考えられるが、今回考慮に入れていない。このような状況のもと、刺網の汚損の程度を乾燥重量でみると浅場に設置した刺網が476.6mgであるのに対し、深場に設置したものは、ジカバエ、宙づりそれぞれ259.3mg、226.6mgであり、浅場に設置した刺網の方が汚損は激しい傾向であった。しかし設置方法による付着状況の差は見られなかった。

また刺網付着物の灼熱減量(%)でみると、設置方法では宙づりがジカバエよりも高かった。即ち有機物量の割合が宙づりで高かった。

その各々設置した刺網の付着物を検鏡したところ、全ての標本において調査当日の本水域で最もふつうに見られた *Closterium aciculae* (ミカヅキモ) が第一優占種となっていた。ついで *Spirogyra* sp. (アオミドロ)、*Melosira granulata* など網に掛かりやすい糸状性の種類が優占となっており、とくに刺網にだけ特異的な種類が見られるわけではなかった。これらのことから今回、刺網に付着したものは湖流などの流れに乗って漂っているプランクトンが刺網の網目に多数引っかかっている現象だと思われた。

今回の結果は、1水域、1時期だけの結果であり、また漁業者から寄せられる情報ほどの刺網の汚損についても把握できなかった。今後、刺網操業の汚損状況の聞き取り等を含め詳細な調査が必要である。

図 沖島南東部に設置した刺網(23節)の汚損状況(設置約6時間)

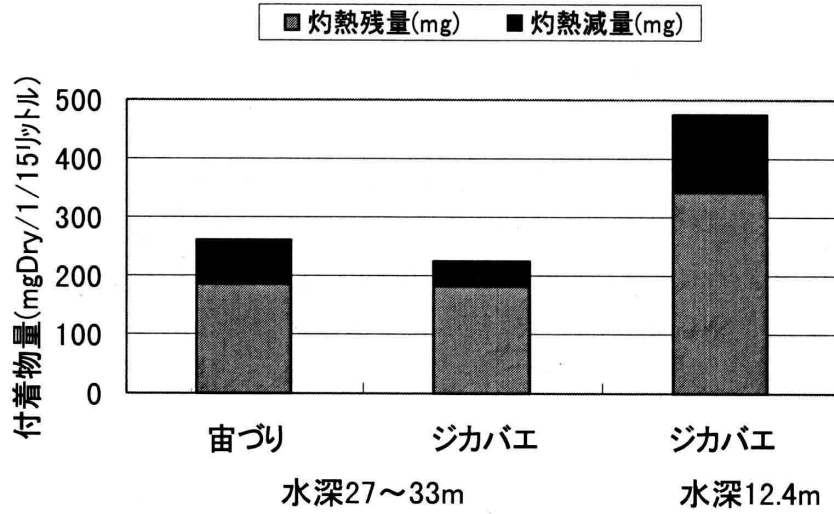


図 刺網の付着物調査地点